

# クルマエビ養殖挑戦

## 廃校の未来

人工海水がたっぷり入った大型の水槽。たもすくいとすると、すしネタの高級食材としても知られるクルマエビが勢いよく跳びはねる。かつて小中学生に昼食を提供していた旧板取学校給食センター(関市板取)は、エビの養殖場として活用されている。

養殖を手がけているのは、金属製品やセキユリティー商品の開発・製造販売の東海理研(同市武芸川町谷口)。2016年3月に閉じた給食センターを借り、3年前に養殖事業に参入した。中山間地域の70歳以上の住民が働けるような環境をつくらうと、社長の佐藤明広さん(64)と製造課

### 関市・旧板取学校給食センター 地元企業 高齢者が働ける場 探る



クルマエビが養殖されている水槽。自社の開発設計技術を用いた＝関市板取、旧板取学校給食センター

長の山田正道さん(49)が二人三脚で奮闘している。水槽は直径4メートル、深さ1.5メートル。今季は熊本県の業者から体長1センチほどの稚エビを昨年11月に5千匹購入した。人工海水を注ぎ込んだ水槽には人工砂が15センチほど敷き詰められている。水槽は直

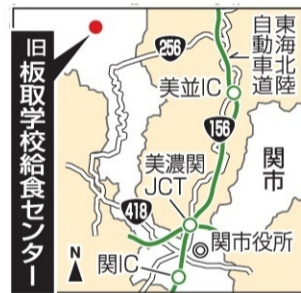
自社の開発設計技術を生かし、協力会社に製造を依頼した。人工海水はろ過装置を使って水質を保ち、水温や水



養殖されているクルマエビ。青灰色の体と褐色のしま模様

位、溶存酸素量や水素イオン指数(pH)などは計測器からデータが送られ、遠隔で管理している。現地での作業も欠かせず、交代で毎日足を運び、ふんや餌の残りかすを除去するフィルターを掃除し、脱皮した殻をすくっている。クルマエビは順調に成長し、15センチになった。

1年目と2年目は失敗し



た。体長7、8センチに成長すると、突然共食い始めた。毎日多くのクルマエビが死んだ。「当時は水質を保てず、水温も上がったことで環境が悪くなったのではないかと山田さん。専門家が餌を取り扱う業者の助言を得て、食用に適した大きさに成長するまでによくこぎ着けた。

「3年間で陸上養殖の難しさを理解できた。専門的な指導者がいなければ、成果を上げづらい」と佐藤さん。ゆくゆくは養殖システムをパッケージ化し、各地の中山間地域向けに販売することを考えていたが、今年4月から陸上養殖業が届



【旧板取学校給食センター】1994年3月に旧板取村立の学校給食センターとして完成。板取小学校と、北隣に校舎があった板取中学校(現板取川中)の給食を調理した。鉄骨造り平屋で、建物の一部は板取中のランチルームに利用。生徒数の減少で板取中は2016年3月に閉校し、センターは板取小に移転した。

け出制に変更されたことや電気代の高騰などで「事業化のハードルが一つ上がった」(佐藤さん)ため、今季でいったん区切りを付けることを決めた。

一方で今年から3年計画で、農業ビジネスの可能性調査を始めた。佐藤さんは「高齢者の働く環境を盛り上げるにはクルマエビの養殖が農業がよいのか、3年後に判断したい」と意欲は衰えない。「人生100年時代を健康で、経済的に安定し、幸せに暮らせる仕組みづくりを目指したい」と描く。(松田尚康)

(この企画は随時掲載します)